

† 「神の母聖マリア、私たち罪びとのために、今も、死を迎える時もお祈り下さい」

- アヴェ・マリアの祈り」より -

5月はカトリック教会において伝統的にマリア様にささげる月間として過ごします。この習慣は18世紀にイタリアで始まったようですが、そもそもマリア様は十字架からのイエス様の言葉を受けた弟子たちが教会の母親として迎えた特別な存在でしたので（ヨハネ19・26～27）、初期教会の時代から彼女をたたえる多くの記念日が整えられてきました。世界中で特に大切にされているのが1月1日「神の母聖マリア」、8月15日「聖マリアの被昇天」、12月8日「無原罪の聖マリア」などです（この他にも国や地域によって様々な記念日が存在します）。ちなみに、ここ水巻カトリック教会は「絶えざる御助けの聖母」に捧げられており、祭壇の右側に安置されているイコン（聖画）はそのマリア様を描いています（6月27日が記念日です）。

このように5月は、母親という存在に思いを馳せる事とマリア様の姿を思う事とを重ねることによって、より母親としての姿、また私たちに向けられている母親の思いなどに気づき、それを深めることができます。今回は数あるマリア様の姿を示したご像のなかで最も有名な「無原罪の聖マリア」のご像を参考にしながら深めていただけたら嬉しいです。子どもたちにもこのマリア様のご像を用いて母親の姿や思いなどについて話しました。

①、見つめて見守る姿

・マリア様の目線はすべての子どもたちに向けられています。そばに寄って同じ目線で支えてあげることも大事ですが、子どもたちの体や心はずっと小さいままではなく様々なものを吸収して成長します。成長していく子どもの目線の先に広がる道を自分で選ぶ様子を見つめ、見守っていることを強調していると言えます。マリア様は吸収していいものと悪いものとを識別するためにも子どもたちから視線を逸らすことはありません。母親は手を差し伸べることと同時に、子どもたちが自立することができるように見守る存在なので、マリア様も私たちが成長し、自立して自分の選んだ道を歩めるように見守っているのです。

・「母親は何歳になっても母親」という言葉を聞きますが、実際、母親は子どもたちが苦しんでいる時にはいち早く気づき、自分の都合を後回しにしてでも支えようとし、痛みまでも共有しようとし、母親にとって子どもたちは自分のからだの一部と言っても過言ではないからです。マリア様も私たちが自分で人生を決めて歩んでいる時、それだけでなく死を迎える時も母親として関わって下さいます。子どもたちが死に直面する時ほど自分が代わってあげたいほどに苦しむのが母親という存在ですから。『アヴェ・マリアの祈り』は、母親としてのマリア様の姿に触れることでより深まる祈りなのです。

②、やさしく迎える姿

・マリア様の両手は広げられていますが、これは子どもたちを迎える姿を表しています。自分で頑張ってきた時、悪いことと良いことを選ぶことができる人生において良いことを選ぶことができた時、心からの優しさに飢えている時、傷付けられて苦しんでいる時など、母親であるマリア様は手を広げて温かく抱擁して下さるのです。

・生まれたイエス様を神殿で捧げた時にシメオンという人に告げられた言葉を受けとめたマリア様は、自分の子であるイエス様の死だけでなく、私たちの身に起こり得る困難や苦しきも受けとめられました（ルカによる福音書 2・34～35 参照）。だからこそ、子どもたちである人類が味わう苦しきや痛みを他人事としてではなく、自分のことのように、つまり母親として受けとめられるのです。

・神さまは、たとえ悪いことをしたとしても、心を入れ替えて自分のところへ戻って来るようにと促す方です（ルカ 15・11～32「放蕩息子のたとえ話」）。そのためにマリア様に母親としての役割を与えられました。悪いことをしたという事実は消えませんが、神さまはマリア様に母親として一人の子どもも失うことがないように手を広げ、やさしく包み込んで心を癒すように役割を与えられたということです。心を入れ替えようとする時に、手を広げて迎え入れてくれるマリア様の姿は大きな癒しとなるのです。キリスト教ではよく「罪びと」という言葉を使いますが、それは心を入れ替えて良く生きようと望むすべての人に及び表現です。母親であるマリア様はそんな「罪びと」のためにいつも祈って下さる方なのです。

③、誘惑するものを力強く踏み付ける姿

・マリア様の足の下にはヘビがいます。聖書によればヘビは誘惑するもの＝悪魔の象徴なので（創世記 3 章参照）、その悪魔を踏み付けている姿です。聖書は人間が誘惑によって罪に陥り、その結果、命あるものすべてに死が及びようになったことを描いていますが、マリア様は神さまから救い主の母親として選ばれることによってこの死から免れました。このことを記念する日が 12 月 8 日（無原罪の聖マリア）で、8 月 15 日はそのマリア様が死を迎えずにそのままの姿で天に上げられたことを記念します（聖マリアの被昇天）。

・マリア様は誘惑するものによって子どもたちの心が悪くなり、罪を犯してしまうことがないように、ヘビの姿として描かれたこの誘惑するものが子どもたちの方へ行くことがないように力強く踏み付けています（ヘビの口には、アダムとエヴァを誘惑して食べさせた神さまから食べてはならないと言われていた果実を象徴するリンゴがくわえられています）。このように母親であるマリア様は子どもたちが悪いものに染まらないように、そして、神さまの思いを大切に平和に過ごせるようにと懸命に守っているのです（そんな神さまの思いや、マリア様の姿を忘れて誘惑に負けてしまうことは本当に悲しいことです）。